

平成27年度 玉川大学TAPセンター 開設記念シンポジウム

—「K-16におけるアドベンチャー教育の現在と未来」を終えて(実施報告)—

TAPセンター 川本和孝

〈実施概要報告〉

平成27年4月に玉川大学学術研究所心の教育実践センターとしての15年を踏まえ、新たにTAPセンターが開設し、その記念シンポジウムを翌年の3月5日、6日の2日間で開催した。

初日にはアメリカから招聘した、体験学習、アクティブ・ラーニング、アドベンチャー教育の第一人者であるJennifer Stanchfield（ジェニファー・スタンチフィールド）先生による、基調講演が行われた。ジェニファー先生からは、アメリカ国内の学校現場におけるアドベンチャー教育の現状や、教育現場における振り返りの重要性を、脳科学研究の先進的な研究の観点を交えてお話いただいた。また、その後ジェニファー先生に加え、様々な体験学習法について造詣が深い東京大学大学総合教育研究センターの中原淳准教授、全国小学校学校行事研究会の会長である鈴木純一郎先生にご登壇いただき、基調講演に関するパネルディスカッションを実施した。その際、ジェニファー先生には、国外の学校教育・アドベンチャー教育、という観点から、また中原先生には大学教育及び企業研修、「大人の学び」という観点から、また鈴木先生には小学校・中学校における体験学習の現状という観点から、それぞれのお話をしていただいた。3名の先生方の観点は異なるものの、焦点化された主なテーマは、「アドベンチャー教育における振り返りが、どのようにして日常に対する変化を及ぼすことができるのか」であった。また、午後には3名の先生方にTAPセンター長代理の難波克己准教授、TAPセンター村井助教、川本助教を加えた5会場にて分科会を実施し、様々な観点から「K-16におけるアドベンチャー教育の現在と未来」に関して、議論を深めることができた。

2日目には、K-16におけるアクティブ・ラーニングの一環として、「TAPをどのようにカリキュラムの中で活用しているのか」という内容を中心として、Jennifer Stanchfield先生を含む5会場ワークショップを展開した。5会場にて実施されたワークショップにて、TAPの様々な展開・活用方法を周知していただくことができたことは、大きな成果の一つである。今回は、そうした2日間の成果を改めて報告していく。

実施概要

日程：平成27年3月5日（土）、6日（日）

1日目：シンポジウム

9：30	10：00	13：00	15：00	17：00
受付	シンポジウム	パネルディスカッション	分科会	終了

参加者数：169名

場 所：大学教育棟2014 大講義室及び6F

参加費：無料

内容（当日の学生の記録より／以降敬称略）

後援

海老名市教育委員会

川崎市教育委員会

多摩市教育委員会

町田市教育委員会

横浜市教育委員会

● 基調講演

「学校におけるアドベンチャー教育の活用と発展」

特別講師：Jennifer Stanchfield

「開会挨拶」 小原 芳明学長

「TAPのこれまでと未来に向けて」 難波 克己

- ・ TAPのこれまでの歩みと体験学習のキーワード
- ・ ジェニファー先生の紹介

「学校におけるアドベンチャー教育の活用と発展」 ジェニファー・スタンチフィールド先生
4年前のTAPのシンポジウムと今回のシンポジウムについて

○心に響くカード紹介（参加者実践）

- ・ 自分が選んだカードについて選んだ理由を近くにいる人と話す

○ジェニファー先生のキャリアについて

- ・ 「特別支援の子どもたち」について学んでいた高校時代
- ・ アドベンチャー教育やレクリエーションセラピーを学ぶ（野外教育への移行）
- ・ アドベンチャー教育を学校現場に導入する方法とは

○学校現場におけるアドベンチャー教育のこれまで

- ・ その歴史はレクリエーションを心理学に導入し始めたこと
- ・ その後体験学習を教科学習に取り入れるようになったこと
- ・ フォーカスを当てるのは“参加者がより良くなるためには？”ということ

○自分がここに来た背景は？（参加者の実践アクティビティ）

- ・ 近くにいる人同士で、自分がシンポジウムに来た背景を話す

○ジョン・デューイの理論について

- ・ 彼の理論を学ぶことは体験学習を知る機会になる（体験学習の父）
- ・ Active Citizenと体験学習の関連性
- ・ 「経験からではなく経験を振り返ることから学ぶ」

○脳科学情報を取り入れた体験学習

- ・ 人間はどのような場面で一番学ぶのか（生きている脳の映像化）

- ・ デューイの体験学習の有用性の裏付け
- ・ 学習者本人の五感や感情の大切さ（楽しい気持ちは学びを促す）
- ・ 自発的で安定した環境は学習を定着させ、理解を深める

○幼児教育の研修から学ぶこと

- ・ 地域の活性化にも繋がる幼児教育
- ・ 幼児にとっての心地よい環境や場の提供（例：テスト前に粘土を使用）

アドベンチャー教育の現在と未来に関して、ジョン・デューイの理論から最新の脳科学を結びつけてお話いただきました。会場が広がったこともあり、初めのうちは全体的に緊張しているように感じましたが、ジェニファー先生のアクティビティーによって、会場全体が和やかな雰囲気になっていきました。アドベンチャー教育の「これまで」と「これから」を、まさに体験的に学ぶことができた貴重な時間でした。（記録：4年生 生田目 舞）

● パネルディスカッション

「K-16で展開されるアドベンチャー教育の未来」

- ・ Jennifer Stanchfield（特別講師）
- ・ 鈴木純一郎（多摩市立瓜生小学校校長・全国小学校学校行事研究会会長）
- ・ 中原 淳（東京大学 大学総合教育研究センター）

コーディネーター：

- ・ 難波 克己（玉川大学TAPセンター長代理）

コーディネーター：難波 克己

- ・ この会場にはどんな方々が来場しているのかの確認（保育・幼・小・中・高・大学・特支の先生方、行政機関、民間企業、福祉、大学院生、大学生）
- ・ ファシリテーションとは何か（ヨーロッパのおもちゃを使用した説明）

パネラー1：鈴木 純一郎氏

- 学校現場でのアドベンチャー教育について
- ・ 全国小学校学校行事研究会会長として学校にアドベンチャー教育を生かす
- ・ キーワード：感動がある体験、仲間を思う体験、本物と触れる

パネラー2：中原 淳氏

- 大人のアドベンチャー教育について
- ・ 研究テーマ「大人の学びを科学する」（人材育成開発）
- ・ リフレクションとフォーカシング
- ・ 非日常の世界の重要性
- ・ アクティブ・ラーニングを実施している学校とそうでない学校の違い

パネラー3：ジェニファー・スタンチフィールド氏

- 体験教育について
- ・ 体験から学ぶ「子どもたちの社会性と情動の学習」
- ・ 学びの過程こそが振り返り
- ・ 「遊びの中に楽しさを見出す」の実践（アクティビティ：Gatcha）
- ・ 子どもの遊びにおける大人の介入

ま と め：難波 克己

○3人の講師の話聞いて、自分の経験に関連させながら周りの人と話す

質疑応答：

「昔と今の大人の状況の決定的な違いとは何か？」

(回答：中原先生)

雇用形態が違うため働き方も違うこと。多忙化が進んでいること。情報化社会であること。これが元に戻ることはないだろう。

「学校現場の各教科で振り返りの実施をするにあたり、具体的な方法とポイントは何か？」

(回答：中原先生)

頭を働かせることができる問いが大切になる。ポイントを絞ること。

(回答：ジェニファー先生)

例えば比喻として、物や絵を使う。振り返りはそもそも、活動の最後に行うものではない。振り返りというものがどういうものなのかを考える必要がある。自然体で、大人数よりは少人数で振り返りをすることが望ましい。

アドベンチャー教育に関する実践事例を取り上げながら、学びを深めていくためのファシリテーターの役割や、振り返りに関して3名の先生方からお話をいただきました。3人の先生方の研究テーマや実践していることは、違いこそあれ共通している点が多く、個人的にも今までの学びと繋がる場所があり、とても興味を惹かれるものでした。また、3人の先生方のお話のあとで設けられた、参加者と講師の方々を含んでの(会場内を自由に動いての)自由討論は、参加されている方々の貴重な交流の場となり、自由で話しやすい雰囲気の中で進んでいきました。

(記録：4年生 生田目 舞)

○分科会(敬称略・50音順) ※以降は記録者のコメントのみ記載

第1分科会「体験教育におけるプロセッシングを大切にしたいファシリテーションの意味と方法」

Jennifer Stanchfield (特別講師)

参加者：42名

様々な活動やそれに伴う活動事例を通じて、グループや個に合わせたファシリテーションの方法があるということ、体験的に学ぶことができました。また、初対面の方々が多い中でも、参加者の方々が真剣に話し合う光景を通じて、「きっかけ」としての体験(活動)の重要性について実感することもできました。振り返りの場面では、ジェニファー先生の一つの問いから、一人一人違った学びのシェアが起こり、多様性を引き出すためのファシリテーターの「問いかけ」のスキルの重要性にも、気付かされた時間となりました。

(記録：2年生 高橋 健太)

第2分科会「学校教育における体験学習のこれから」

川本 和孝(玉川大学TAPセンター)

第1部 体験学習の実践例から

- ・秋吉 健司（三鷹市立井口小学校）「教科の観点から」
- ・佐藤 美留（座間市立東原小学校）「学級活動の観点から 体験学習の実践」
- ・大石 扶美子（多摩市立瓜生小学校）「学校行事の観点から」

第2部 体験学習における「体験の質」の向上と教師に求められる指導力

- ・甲斐崎 博史（西東京市立栄小学校）

第3部 学校教育における体験学習のこれから

- ・甲斐崎 博史（西東京市立栄小学校）
- ・鈴木 純一郎（多摩市立瓜生小学校校長・全国小学校学校行事研究会会長）
- ・橋本 大輔（さいたま市教育委員会）

参加者：37名

第1部では3名の先生方からアドベンチャー教育の実践事例（教科、学級活動、学校行事の観点から）の発表をしていただきました。導入・活用していく場面や方法の工夫によって、より多くの可能性が見出せることがわかりました。第2部の甲斐崎先生の発表では、表題に対して「体験の質とは教師が向上させるものではない。体験の質を決めるのは学習者である。だからこそ教師のファシリテート力をスキルアップする必要がある」というお話から、教師のファシリテーターとしてのあり方について考させられる時間となりました。第3部では、甲斐崎先生に加え、鈴木先生、橋本先生の3名で、「学校教育における体験学習のこれから」について、現行及び次期改訂の学習指導要領を踏まえてお話しいただき、学校教育におけるこれからのTAPのあり方について考える上で、非常に意義のある時間となりました。

（記録：2年生 楡原 侑）

第3分科会「体験をいかに振り返るか？：リフレクションの研究の最前線」

中原 淳（東京大学大学総合教育研究センター）

参加者：57名

「リフレクションとは何なのか」、「リフレクションはなぜ必要なのか」という体験学習の命題とも言える内容に対し、リフレクション研究の「これまでとこれから」を結びつけてお話しいただきました。リフレクションの必要性を次の3点からご説明いただきましたが、今後この意味の本質が分かるよう、自身の学びを深めていきたいと強く思える時間となりました。

〈リフレクションはなぜ大事か〉

- ① 知識を創り出すことに経済価値がある⇒高次思考を支える知性こそがリフレクティブなもの
- ② 問題はより複雑になってきている⇒問題解決よりも問題設定が難しい
- ③ 現代は個人が人生を引き受けることを求める⇒人生はアンカーとドリフトの繰り返し

（記録：3年生 大竹 美佳）

第4分科会「学びのイノベーション～Adventure based learning～」

難波 克己（玉川大学TAPセンター長代理）

参加者：31名

- ・Active learningについて・コミュニティーづくりについて・学びのコンセプトマッピング
- ・人間関係づくりの日常化について・組織の活性化 ・Adventure教育の普及、広報について

・“Adventure教育”とは

といった内容に対して、参加者の方々の興味あることをディスカッションしながら学びを深めていきました。活動における学びと、ディスカッションによる学びを交えながら展開していく、まさにActive Learningな時間でした。

(記録：2年生 小平 麻由)

第5分科会「TAPで考える“野外教育”って？～Glocalizationの視点から～」

村井 信二(玉川大学TAPセンター)

参加者：12名

「参加者のペース・ニーズに合せたファシリテーション」という点において、非常に学びある時間となりました。①子供の時の野外での遊び ②野外や環境をどう捉えているか ③人生の中で一番のAdventure ④どんな人、本を知っているか、これら4項目をA4の紙に書いて、ペアでシェアしていく作業においては、参加者の方々が考える野外教育のイメージを知ることができるだけでなく、その背景にある「人生観」にも触れることができたような気がしました。自身の「世界観・人生観」が広がっていくような時間を過ごすことができました。

(記録：1年生 中村 茉生)

2日目 「ワークショップ」

9:00	9:30	9:30-12:00	12:00-13:00	13:00-15:30	15:30	15:45
受付	開会 Opening	ワーク ショップ	昼食	ワーク ショップ	閉会式	終了

1) Workshop1 (AM)

「Bring Learning to Life With Engaging Reflection Tools and Techniques」

Jennifer Stanchfield (特別講師)

参加人数：54名

振り返りの際に用いることができる様々なToolに関して学ぶことができました。活動中にジェニファー先生が、「Toolを選ぶ活動の意図は、参加者が全員集まるまでの間を緊張する空間ではなく居心地の良い空間を作るため」とおっしゃっていましたが、「Toolを選ぶ空間にも大切な意味がある」ということが、自身にとっても大きな学びでした。また、振り返りは英語でDebriefingとReflectionの二つがある、とのことでした。Debriefing：一時的に報告する、結果報告⇒強制力があるように感じる。Reflection：思い返す⇒教育現場ではReflectionを用いるのがよい。

自身がファシリテートする祭にも、しっかりと使い分けられるようにしていきたいと感じました。

(記録：1年生 小林 鈴佳)

Workshop1 (PM)

「Inspire,Engage,and Motivate: Tips & Tools for the Art of Experiential Group Facilitation and Teaching」

参加人数：58名

体験学習のファシリテーションをしていく上で、参加者自身がそのチャレンジレベルを設定していくことの重要性を学びました。活動中に選択権のない強制があった場合、「嫌」というネガティブな感情を生じさせ、それは「学び」をストップさせてしまいます。そのため、参加者が選択権を持てるようにすることが、やる気に満ちて主体的に参加できる環境を作るためのポイントとなる、とのことでした。また、活動中における様々なToolの活用に対して、ジェニファー先生は「アップサイクリング（目的を変えてより効果的に物事を活用すること）」という言葉を用いていましたが、既存の固定観念に縛られず、新しい発想で様々なToolを活用していくことの大切さを学びました。

(記録：1年生 小林 鈴佳)

2) Workshop2 (AM、PM)

「大学アドベンチャー教育におけるアクティブ・ラーニングとプロセシングの関わり」

・難波 克己（玉川大学TAPセンター長代理）

参加人数：35名（AM）、36名（PM）

活動を多く展開していくというよりも、ディスカッションを主体としたワークショップでした。その中でも特に印象に残っているのは、「1日目の気づき・学び・再確認・発見・想い・感想・メンタルノートを各自で記入し、それを三人組で共有する」ということでした。その後のシェアの際に、難波先生から「体験学習のための体験学習になっていないか」、という問いかけがありましたが、非常にドキッとさせられました。また、「自己理解をしているから他者理解ができる」、そして「他者理解をすることにより自己理解ができる」というお話が、とても強く印象に残りました。

(記録：1年生 小杉 萌)

- AM、PMとも同様の活動であったため、AMの記録。

3) Workshop3 (AM、PM)

「初めてのTAP～チャレンジコースを体験しよう～」

・白山 明秀（玉川大学TAPセンター）

参加人数：25名（AM）、21名（PM）

これまでにTAPを体験したことがない方や、玉川大学に常設されているチャレンジコースを体験したことがない方を対象としたプログラムでした。それぞれの活動における振り返りを通じて、「Asking Skill」の重要性に焦点化していたことが印象的でした。活動中のみならず、振り返りの際にも「強制にならない」環境作りが大切だということを、改めて学ぶことができる時間となりました。活動中は終始、楽しく和気あいあいと過ごすことができると共に、参加者の方々にとってはTAPを通じて集団が徐々に発達していく段階を体験していただけたのではないのでしょうか。

(記録：1年生 中村 茉生)

- AM、PMとも同様の活動であったため、AMの記録。

4) Workshop4 (AM、PM)

「プログラムをデザインするとは？～体験の意味を考える～」

・村井 伸二（玉川大学TAPセンター）

参加人数：35名（AM）、30名（PM）

その場に集まった参加者の方々の今の「感情」を、写真を用いてシェアしていくことから始まり、「プログラムをデザイン」することを考えていく時間となりました。そもそも「プログラムをデザイン」するとはどういうことなのか、ということに対して村井先生は直接的にその答えを示すのではなく、活動を通じて参加者の方々が考えていけるような工夫をされていたのが、とても印象的でした。特に、活動の意味づけを考える際において「PAY IT FORWARD」の映画鑑賞を行い、「意味づけとは何か」、「個人の強みを繋げていくことが出来たらどうか」、「どうつなげて行くかは指導者のきっかけづくりによる」というお話に繋げていったことは、とても新鮮でした。

（記録：1年生 佐野 友里香）

- AM、PMとも同様の活動であったため、AMの記録。

5) Workshop5 (AM、PM)

「学生の学生による学生のためのTAP」

・川本 和孝（玉川大学TAPセンター）・TAP学生インターン

参加人数：19名（AM）、17名（PM）

TAPセンターに所属する学生インターンによる、学生を対象としたプログラムでした。今回ファシリテートを担当したのは、4年間TAPを学び、3月に卒業を控えた4年生が担当をしました。チャレンジコースの使用こそなかったものの、出会いの段階から参加者の楽しそうな姿がとても印象に残りました。普段の学生生活の中で、「自己の理想像を持ちづらい場合、それをどのように生じさせることができるのか」ということを、体験を通じて考えていく機会となりました。ファシリテーターの4年生達が今回のTAPの活動を通じて、自分たちの経験や今回のプログラムに込められた想いを語る際に、参加者の方々が食い入るように聞き入っていたのが、とても印象的でした。「学生でもここまでファシリテーションできるんだ」ということを改めて知ることができたと共に、「4年生のすごさ」を実感することができる時間となりました。

（記録：2年生 楡原 侑）

- AM、PMとも同様の活動であったため、PMの記録をもとにして。

〈まとめ〉

TAPセンターの開設にあたり、これまでの成果と今後の展望を公表する、非常に価値のある機会となった。大学教育改革や次期学習指導要領の改訂に向けて大きく動き出している今日において、今後のTAPのあり方もまた重要な岐路を迎えている。前号の川本(2016)¹⁾でも述べているが、次に挙げているような、次期学習指導要領の改訂のトピックとなっている点においては、今回のシンポジウムで議論されたことは、直結して考えていける点が非常に多かったと感じている。特に、今回焦点が当たった、「振り返り（リフレクション）」に関しては、民間企業や地域と同様に学校現場においてもまた、その方法を身につけていくプロセスが、現状では不明瞭な点が多分にあると感じている。

「教育課程企画特別部会における論点整理」²⁾において、「新しい学習指導要領等を目指す姿」に関して次のように述べられている。

(2) 育成すべき資質・能力について

(育成すべき資質・能力についての基本的な考え方) 1) 「何を知っているか、何ができるか (個別の知識・技能)」各教科等に関する個別の知識や技能などであり、身体的技能や芸術表現のための技能等も含む。基礎的・基本的な知識・技能を着実に獲得しながら、既存の知識・技能と関連付けたり組み合わせたりしていくことにより、知識・技能の定着を図るとともに、社会の様々な場面で活用できる知識・技能として体系化しながら身に付けていくことが重要である。

2) 「知っていること・できることをどう使うか (思考力・判断力・表現力等)」問題を発見し、その問題を定義し解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、プロセスを振り返って次の問題発見・解決につなげていくこと (問題発見・解決) や、情報を他者と共有しながら、対話や議論を通じて互いの多様な考え方の共通点や相違点を理解し、相手の考えに共感したり多様な考えを統合したりして、協力しながら問題を解決していくこと (協力的問題解決) のために必要な思考力・判断力・表現力等である。特に、問題発見・解決のプロセスの中で、以下のような思考・判断・表現を行うことができることが重要である。
・ 問題発見・解決に必要な情報を収集・蓄積するとともに、既存の知識に加え、必要となる新たな知識・技能を獲得し、知識・技能を適切に組み合わせ、それらを活用しながら問題を解決していくために必要となる思考。

- ・ 必要な情報を選択し、解決の方向性や方法を比較・選択し、結論を決定していくために必要な判断や意思決定。
- ・ 伝える相手や状況に応じた表現。

3) 「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか (学びに向かう力、人間性等)」上記の1) 及び2) の資質・能力を、どのような方向性で働かせていくかを決定付ける重要な要素であり、以下のような情意や態度等に関わるものが含まれる。
・ 主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する能力、自らの思考のプロセス等を客観的に捉える力など、いわゆる「メタ認知」に関するもの。

- ・ 多様性を尊重する態度と互いのよさを生かして協働する力、持続可能な社会づくりに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりなど、人間性等に関するもの。

アクティブ・ラーニングが大きく着目されている今日において、TAPは様々な展開・活用法が期待される場所である。今回の2日間において、小学校～大学に至るまで、TAPそのものをアクティブ・ラーニングとして活用する学習法や、アクティブ・ラーニングを可能とする個人・集団の基盤作りのためのTAPに至るまで、今後のTAPの様々な可能性を見出すことができたのではないか。そのような意味においても、今回の2日間はTAPにおける今後のあり方を改めて見直し、方向性を示していく上においても、非常に貴重な機会となり、また大きな成果であったと言えよう。

【お礼】

今回の開催にあたり、ご支援いただいた方々、後援していただいた教育委員会の方々には、大変お世話になりました。この場をお借りして、改めてお礼申し上げます。

ありがとうございました。

【引用・参考文献】

- 1) 川本 和孝「教育課程上における特別活動とアドベンチャー教育の理論的関連付けに関する一考察—学級活動とTAPの関連性を図るための概念的な整理を中心として—」TAPセンター年報第1号 玉川大学TAPセンター、2016年
- 2) 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「教育課程企画特別部会における論点整理」、2015年